

抗炎症作用における意義

第 93 回日本消化器病学会総会 青森

2007.04.19

④森山一郎 石原俊治 三島義之 大嶋直樹

角田 力 大谷 文 石村典久 門脇泰憲

天野 祐二 足立経一 木下芳一

AP-I dsDNA decoy による炎症性腸疾患の新規治療の検討

第 93 回日本消化器病学会総会 青森

2007.04.19

⑤三島義之 石原俊治 大嶋直樹 角田 力

大谷 文 森山一郎 石村典久 木下芳一

炎症性腸疾患患者における末梢血中の CD5 陽性細胞の検討

第 93 回日本消化器病学会総会 青森

2007.04.19

⑥大嶋直樹 石原俊治 大谷 文 角田 力

三島義之 森山一郎 天野祐二 木下芳一

消化管上皮細胞の自然免疫応答における Toll 受容体シグナルの負の制御機構の意義

第 49 回日本消化器病学会大会 神戸

2007.10.19

⑦三島義之 石原俊治 大嶋直樹 森山一郎

角田 力 大谷 文 門脇泰憲 天野祐二

木下芳一

消化管粘膜内 CD5 陽性 B 細胞の自然免疫応答

第 49 回日本消化器病学会大会 神戸 2007.10.1

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

プロテオーム解析を用いた潰瘍性大腸炎のバイオマーカー探索

研究協力者 坪内 博仁 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科消化器疾患・生活習慣病学 教授

研究要旨：患者血液を用いたプロテオーム解析は蛋白濃度を網羅的かつ迅速に測定でき、疾患の病態解明や診断マーカーに有用な蛋白質を同定できる可能性がある。本研究ではプロテオーム解析装置を用いて、正常者と比較して潰瘍性大腸炎患者血液中に発現が亢進している蛋白のひとつが好中球ペプチド（抗菌ペプチドの一つである human neutrophil peptide; HNP 1-3）であることを明らかにした。また、血液中 HNP 1-3 はクローン病との鑑別や潰瘍性大腸炎患者における治療効果予測にも有用である可能性があることを明かにした。

共同研究者

宇都浩文 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
上村修司 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
藤田 浩 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
沼田正嗣 京都大学医学部探索医療センター

A. 研究目的

潰瘍性大腸炎 (UC) は多遺伝性疾患であるが、その発症や病態進展には腸内細菌に対する抗菌ペプチドなどの宿主免疫機構が深く関わっていると考えられる。しかし、その複雑な病態は十分解明されておらず、簡便な診断法や治療効果予測法は確立されていない。患者血液を用いたプロテオーム解析はタンパク質濃度を網羅的かつ迅速に測定でき、疾患の病態解明や診断マーカーに有用なタンパク質を同定できる可能性がある。本研究では、UC 患者血液中に発現が亢進していた好中球ペプチド（抗菌ペプチドの一つである HNP 1-3）の臨床的有用性を検討したので報告する。

B. 研究方法

1. Surface-enhanced laser desorption/ionization time-of-flight mass spectrometry (SELDI) プロテインチップシステムを用いて、UC と健常人の血清タンパク質発現を比較した。
2. UC、Crohn 病 (CD)、早期大腸癌 (CRC) と健常人の血液中の HNP1-3 濃度を ELISA で測定した。

(倫理面への配慮)

倫理面の配慮

- a. 個人の人権の擁護：1) 研究内容について

て十分な説明を行い、研究への参加は任意であること、研究に参加しない場合でも、従来通り診療を受けることができることを示す。2) 参加者のデータは、厳重な秘密保持のもとに管理され、本研究のデータが参加者に不利益を及ぼすことはないと考えられる。

b. 個人情報の管理：1) ID 番号、氏名、住所、電話番号などの個人を特定できる情報を除いたものを作製し、新たな番号を付与し、本研究にはこの番号のみを用い、個人が特定できる名前などを用いない。2) 対象者由来の血液サンプルは個人が同定できる情報を消去して、番号を付与する。

c. 対象者に理解を求め同意を得る方法：担当医より、研究内容について説明を行ない、書面による同意を得る。

d. 研究等によって生じる個人への不利益：静脈穿刺は侵襲性はほとんどなく、被験者に不当な危険が生じることはほとんどない。個人のプライバシーに関わる点については上記のように十分な配慮を行い、対象者の不利益が生じないようにする。

C. 研究結果

1. 低分子領域に有意差 ($p < 0.05$) のあるタンパク質のうち、健常人と比較し UC 群で高値であった約 3400m/z 付近の 3 個のピークを分子量から HNP1-3 と推定し、抗 HNP1-3 抗体を用いた免疫沈降反応から目的ピークを HNP1-3 と確定した。

2. 平均 HNP1-3 濃度は 4 群 (UC, CD, CRC, 健常人群) の比較では UC 群が最も高く、UC 群の HNP1-3 濃度は CD 群、健常人群よりも有意に高値であった。また、UC 群における治

療前のHNP1-3濃度は、治療抵抗群より奏功群で有意に高値を示し、治療奏功群のHNP1-3濃度は、治療により低下する傾向であった。

D. 考察

血液中 HNP 1-3 は UC の診断や治療効果予測に有用なマーカーである可能性が示唆された。また、HNP1-3 は自然免疫および獲得免疫に関与し、上皮障害作用も有することが知られている。宿主免疫機能の調節異常を引き起こす可能性のある腸内細菌とその抗菌ペプチドである HNP1-3 の相互作用は、UC の病態に関与する可能性がある。本研究の結果から、プロテオーム解析による炎症性腸疾患の患者血液の網羅的タンパク質発現解析は炎症性腸疾患の診断バイオマーカー探索に有用であるだけでなく、病態進展に関わる分子を同定でき、病態解明につながる可能性があると思われる。

E. 結論

血液中 HNP 1-3 濃度測定は潰瘍性大腸炎とクローン病との鑑別や潰瘍性大腸炎患者における治療効果予測に有用である可能性が示唆された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- (1) Kanmura S, Uto H, et al. Early diagnostic potential for hepatocellular carcinoma using the SELDI ProteinChip system. *Hepatology*. 45, 948-956, 2007.
- (2) Sakiyama T, Fujita H, Tsubouchi H. Autoantibodies against ubiquitination factor E4A (UBE4A) are associated with severity of Crohn's disease. *Inflamm Bowel Dis*. 14, 310-317, 2008.

2. 学会発表

- (1) Kanmura S, Uto H, et al. Identification of candidate biomarkers for inflammatory bowel disease using a SELDI proteinchip

system. *Digestive Disease Week (DDW 2007)*. Washinton (USA). 2007 年 5 月 20-23 日.

- (2) Uto H, Sato Y, et al. Proteomic analysis of serum biomarkers in patients with nonalcoholic steatohepatitis using SEDI-TOF/MS or MALDI-TOF/MS. *The 58th Annual Meeting of the American Association for the Study of the Liver Disease (AASLD)*. Boston (USA). 2007 年 11 月 2-6 日.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

なし

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

潰瘍性大腸炎における常在細菌成分に対する異常なサイトカイン応答とその機構

研究協力者 土肥 多恵子 国立国際医療センター研究所消化器疾患研究部 部長

研究要旨：正常大腸粘膜から分離した単核球細胞は、末梢血単核球細胞と異なり、通常腸内細菌叢菌体成分に対して炎症性サイトカインを産生しない。これは大腸マクロファージ細胞ではLPS受容体分子の発現が低いことがメカニズムの一つとして重要であると考えられる。本研究では潰瘍性大腸炎の粘膜固有層細胞からCD33+細胞を分離し、Toll like receptor-4, MD-2といったLPS受容体分子の異常に高い発現を確認した。これによりマクロファージが細菌成分に反応した結果、過剰な炎症性サイトカインの産生がおこって病態を形成していると考えられる。

共同研究者

国立国際医療センター研究所 消化器疾患研究

部：川島 麗、河村由紀、水谷紀子

国立国際医療センター 外科：斉藤幸夫

自治医科大学埼玉医療センター外科：河村 裕、

小西文雄

国立国際医療センター外科および自治医科大学さいたま医療センター外科の協力を得て、潰瘍性大腸炎の手術摘出粘膜から、粘膜固有層細胞を分離した。さらに磁気による自動細胞分離装置AUTOMACSを用いてCD33陽性細胞分画をマクロファージとして精製した。これよりTLR4, MD-2の発現を定量RT-PCRにより解析した。結果は健常粘膜（大腸癌摘出標本の非病変部）1症例を基準としたときの相対比として算出した。

（倫理面への配慮）

本研究計画は各施設の倫理委員会の承認を得ており、すべての組織は提供者への説明とその承認を経て採取された。

A. 研究目的

正常大腸粘膜から分離した単核球細胞は、末梢血単核球細胞と異なり、通常腸内細菌叢菌体成分に対して炎症性サイトカインを産生しない。このメカニズムとして、我々は以前より大腸マクロファージ細胞にリポポリサッカライド（LPS）受容体の一つでありシグナル伝達に必須の分子MD-2が発現していないことを見いだしている。一方、潰瘍性大腸炎では過剰な炎症性サイトカインの産生が認められる。我々は、潰瘍性大腸炎においてマクロファージが腸内細菌の菌体成分に対して異常に反応するために炎症性サイトカインが産生されると考え、マクロファージ画分におけるLPS受容体の発現を検討した。

B. 研究方法

C. 研究結果

大腸粘膜固有層細胞のうちCD33陽性細胞（マクロファージ）が占める画分は健常粘膜において $3.6 \pm 1.0\%$ (average \pm standard error)であったのに対し、潰瘍性大腸炎では $12.5 \pm 1.3\%$ と優位に増加していた。TLR4トランスクリプトレベルの相対値は健常大腸粘膜由来CD33+細胞における 1.81 ± 1.47 に対して、潰瘍性大腸炎粘膜由来のCD33+細胞では 127.1 ± 180.5 と高い上昇率

を示した (P=0.0248)。MD-2 の発現は健常粘膜由来 CD33+細胞で 1.9 ± 1.9 であったのに対して潰瘍性大腸炎粘膜由来の CD33+細胞では 28.99 ± 34.34 と、これも優位な増加を示していた (P=0.04)。

D. 考察

健常粘膜には決してみられない LPS 受容体の異常な発現が、潰瘍性大腸炎のマクロファージにみられた。したがって、潰瘍性大腸炎粘膜のマクロファージは、腸内細菌由来の LPS による刺激に十分応答して炎症性サイトカインを分泌する能力を獲得している。従って、腸内細菌が炎症の持続機転及び再発増悪のトリガーになっている可能性が大きい。このことは潰瘍性大腸炎に対して抗生物質投与やプロバイオティクスが有効であることとよく対応しており、これらの治療法をより発展させるための根拠となる。

E. 結論

潰瘍性大腸炎粘膜ではマクロファージ数が増加しているとともに、健常粘膜ではみられない、LPS 受容体の高い発現がみられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表

1) Kawashima R, Kawamura YI, Mizutani N, Shirai Y, Saito Y, Toyama-Sorimachi N, Konishi F, Kawamura YJ, Dohi T. Aberrant responses to indigenous lipopolysaccharide in the colonic lamina propria mononuclear cells in ulcerative colitis. The 4th Annual Meeting of JSIBD. Tokyo. 2007年12月1日

2) Kawashima R, Kawamura YI, Mizutani N, NT-S, Kawamura YJ, Konishi F, Dohi T. Two distinct types of aberrant responses in the colonic lamina propria cells to lipopolysaccharide (LPS) in ulcerative colitis. 13th International Congress of Mucosal Immunology. Tokyo. 2007年7月11日

3) Kawashima R, Kawamura YI, Mizutani N, Toyama-Sorimachi N, Saito Y, Kawamura YJ, Fumio, Konishi, Dohi T. Aberrant responses of human colonic macrophage-type cells to lipopolysaccharide in ulcerative colitis: upregulated expression of MD-2 and production of inflammatory cytokines. Digestive Disease Week 2007. Washington D. C. 2007年5月22日

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業
難治製炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

炎症と発癌における骨髄の役割

分担研究者 今井 浩三 札幌医科大学 学長

研究要旨：炎症により動員された骨髄由来細胞の発癌への関与は、マウスのヘリコバクター関連胃癌や大腸癌先進部の検討により示唆されている。またヒト大腸癌においても骨髄細胞に由来する癌幹細胞の存在が示唆されている。本研究では、腸管の炎症を基とした colitis associated cancer における骨髄細胞、とくに骨髄間葉系幹細胞の役割を検討することを目的とした。

共同研究者：中垣 卓，有村佳昭，田中浩紀，後藤 啓，細川雅代，永石歆和，田中道寛，山本博幸、山下健太郎，篠村恭久
所属：札幌医科大学第一内科

ットより分離した MSC を 2×10^4 cells/g 個，尾静脈より静注して外因性に MSC を投与した。20 週目に，GFP 陽性細胞の engraft と，MSC 投与群と非投与群における発癌率，癌の大きさについて検討した。

（倫理面への配慮）札幌医科大学動物実験の指針に則り行った。

A. 研究目的

実験腸炎を誘発したラットに発癌物質を投与して colitis associated cancer を誘導し，発癌，進展における骨髄の関与を検討する。さらに，この系を用いて外因性に MSC を投与し，MSC が発癌に与える影響を検討することを目的とした。

B. 研究方法

発癌物質としてアゾキシメタン (AOM)，ジメチルヒドラジン (DMH) を腹腔内投与したラットに，1 週間後より DSS を 1 週間経口投与して腸炎を惹起した。DSS 投与後 20 週目に肉眼所見，病理組織学的所見にて発癌を確認後，癌部，非癌部における cancer stem cell maker である CD133，及び骨髄由来細胞の指標としての CCR1 の発現を検討した。

さらに同様の系において，発癌物質を投与した直後に eGFP トランスジェニックラ

C. 研究結果

発癌物質の違いにより癌病変の有無，個数，大きさに差異を認めた。形態は全て隆起型で，直腸に病変の多発を認めた。病変部の組織学的所見から，病変は癌として矛盾しない所見であった。癌部におけるクリプト間の間質細胞に CD133 の発現を認め，colitis associated cancer における cancer stem cell の関与の可能性が示唆された。また，癌の浸潤先進部周辺に CCR1 の発現がみられ，骨髄由来細胞が浸潤部に動員されている所見を認めた。

MSC 投与では，癌部で同一クリプトの上皮に数個の GFP 陽性細胞を認め，その数は同一切片上の非癌部よりも多い傾向が見られた。

発癌と MSC 投与との関連では、DMH 投与群における癌病変の平均個数は、MSC 非投与群で 0.5 個、投与群では 0 個、AOM 投与群では MSC 非投与群で 2.5 個、投与群で 1.8 個だった。有意差は認めないが、ともに MSC 投与群で数が少ない傾向を認めた。病変の大きさの比較では、DMH 投与群における発癌部病変の大きさの中央値は MSC 非投与群で 0.1cm、投与群では発癌は確認されず、AOM 投与群では MSC 非投与群で 0.5cm、投与群で 0.3cm であった。有意差は認めないもの、MSC 投与群で小さい傾向を認めた。

D. 考察

癌病変部において CD133 陽性細胞が観察されたことから、発癌物質が DSS 腸炎において Intestinal stem cell に何らかの mutation を起こし、cancer stem cell を誘導することにより癌が形成された可能性が示唆された。また癌の浸潤先進部には CCR1 の発現がみられ、colitis associated cancer においても発育、浸潤に骨髄由来細胞が関与している可能性が考えられた。

また MSC の発癌への影響を検討した結果から、cancer stem cell 化する intestinal stem cell を MSC が何らかの形でレスキューすることで、発癌や癌の増大を抑制している可能性が考えられた。さらに、CD133 の発現と取り込まれた MSC との局在等を詳細に検討する必要があると考えられた。

E. 結論

CD133 の発現により、colitis associated cancer における cancer stem cell の存在が示唆された。CCR1 の発現により、特に癌浸潤部における骨髄由来細胞の関与の可能

性が示唆された。また、発癌モデルに対し MSC を投与すると、発癌が抑制される傾向を認めた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

中垣卓、後藤啓、有村佳昭、田中浩紀、細川雅代、山下健太郎、山本博幸、篠村恭久
大腸癌化学療法における biomarker の現状
消化器 第 46 号 3 月号 (投稿中)

2. 学会発表

中垣卓、有村佳昭、田中浩紀、細川雅代、山下健太郎、後藤啓、山本博幸、篠村恭久、今井浩三

炎症と発癌における骨髄の役割
第 4 回日本消化管学会学術集会
大阪国際会議場

2008 年 2 月 7 日、8 日

H. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

1) 特願 2007-141147 「間葉系幹細胞による難治性腸炎の治療」(平成 19 年 5 月 28 日 特許出願中)

2) 特願 2007-194910 「同上追加データ分」(平成 19 年 7 月 26 日 特許出願中)

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

「潰瘍性大腸炎における Smad リン酸化シグナル伝達の解析」

研究協力者 岡崎 和一 関西医科大学内科学第三講座(消化器肝臓内科) 教授

研究要旨：TGF- β は多岐にわたる生物活性を有するサイトカインである。正常上皮細胞では増殖抑制作用やアポトーシスを起こし腫瘍抑制因子として、一方、癌化過程においては TGF- β の産生が増加し活性化され腫瘍増殖因子として作用する。TGF- β シグナル伝達の転写因子として Smad3 は重要である。我々はこれまで Ras を過剰発現させた上皮細胞において JNK を介して恒常的な Smad3 リンカー部のリン酸化 (pSmad3L) が起こり細胞増殖や遊走などの腫瘍機能を示すこと、又、このリンカー部リン酸化をブロックする事で TGF- β 依存的に C 末部のリン酸化 (pSmad3C) が起こり、失われていた細胞増殖抑制能が復活しうる事を報告した。(Cancer Research 67:5090-6, 2007) さらに、ヒト散発性大腸癌の癌化過程において TGF- β シグナル伝達が pSmad3C から pSmad3L に偏向している事象も報告した。(Cancer Research 65:157-65, 2005) 潰瘍性大腸炎は dysplasia を経て癌化する。この過程において慢性炎症が関わるが、慢性炎症によって腸上皮細胞がどのように遺伝子変化を獲得し悪性化するのか分子機構はまだ分かっていない。癌化変異を起こすような癌化促進因子同様、DNA 遺伝子異常を誘導する転写因子を同定する事でこの機構が説明できると思われる。今回、colitic cancer における Smad のリン酸化シグナル伝達機構を解析する事で炎症と発癌の関連について検討した。

共同研究者

川股聖二、松崎恒一、内田一茂、松下光伸¹⁾
日比紀文、松岡克善²⁾、岩男 泰³⁾

- 1) 関西医科大学内科学第三講座消化器肝臓内科
- 2) 慶應義塾大学医学部消化器内科
- 3) 同 包括先進医療センター

A. 研究目的

colitic cancer は散発性大腸癌と異なる発癌過程 dysplasia-carcinoma-sequence が考えられている。前癌病変 dysplasia を有する潰瘍性大腸炎は発癌高危険群に属し dysplasia の早期発見診断が必要である。

今回、colitic cancer における Smad のリン酸化シグナル伝達機構を解析する事で癌化シグナルの分子機構を理解する。

B. 研究方法

リン酸化されるリンカー部位 (pSmad3L) と C 末部位 (pSmad3C) に対して特異的な抗 Smad3 リン酸化抗体を作成した。

(Hepatology 38:879-889, 2003、
Oncogene 23:7416-29, 2004)

上記 2 種類の抗体及び抗 P53 抗体を用い colitic cancer 8 症例に対し検討を行った。

(倫理面への配慮)

個人情報保護法に基づき検体匿名化。

C. 研究結果

正常大腸腺管において Smad3L リン酸化シグナルは腺管底部において細胞の増殖、遊走を起こす、一方、Smad3C リン酸化シグナルは管腔近くの細胞増殖抑制に関与していると思われる。潰瘍性大腸炎で慢性炎症が蓄積すると、I型レセプターを介する TGF- β 腫瘍抑制シグナルが障害され、Smad3 リンカー部、C 末部両方にシグナルが集積する事により分化、脱落を起こしにくくする。これがさらに持続する事により、dysplasia \rightarrow 癌へと変化させる p53 等の遺伝子異常を起こす環境を作ると予想される。p53 遺伝子異常等がさらに JNK 依存性の pSmad3L 発現を上昇させ、相補的に pSmad3C 発現を低下させる。

D. 考察

今回の研究は、潰瘍性大腸炎における発癌を中心に Smad リン酸化シグナル伝達の解析を行った。本邦では、colitic cancer 症例が少なく今回も 8 症例でしか検討できていない。少数検討の為、統計学的解析が不十分である事はいなめない。あくまでも過程の段階であり、今後さらなる詳細につき検討が必要と思われる。

E. 結論

潰瘍性大腸炎の癌化過程において TGF- β シグナルが、Smad3C 末部リン酸化による腫瘍抑制から Smad3 リンカー部リン酸化による腫瘍増殖へと変化する事を明らかにした。慢性炎症に伴う Smad3 リンカー部リン酸化及び C 末部リン酸化は、遺伝子異常を来たす初期段階と思われる。持続的な JNK を介するリンカー部リン酸化による細胞増殖を colitic cancer で認め、逆に C 末部リン酸化を介する増殖抑制は減弱する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Matsuzaki K. Chronic inflammation associated with hepatitis C virus infection perturbs hepatic transforming growth factor beta signaling, promoting cirrhosis and hepatocellular carcinoma. *Hepatology* 46:48-57, 2007

Sekimoto G, Matsuzaki K. Reversible Smad-dependent signaling between tumor suppression and oncogenesis. *Cancer Research* 67:5090-6, 2007

Yoshida K, Matsuzaki K. Transforming growth factor-beta and platelet-derived growth factor signal via c-Jun N-terminal kinase-dependent Smad2/3 phosphorylation in rat hepatic stellate cells after acute liver injury. *American Journal of Pathology* 166:1029-39, 2005

Yamagata H, Matsuzaki K. Acceleration of Smad2 and Smad3 phosphorylation via c-Jun NH(2)-terminal kinase during human colorectal carcinogenesis. *Cancer Research* 65:157-65, 2005

Mori S, Matsuzaki K. TGF-beta and HGF transmit the signals through JNK-dependent Smad2/3 phosphorylation at the linker regions. *Oncogene* 23:7416-29, 2004

Furukawa F, Matsuzaki K. p38 MAPK mediates fibrogenic signal through Smad3 phosphorylation in rat myofibroblasts.

Hepatology 38:879-89, 2003

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧

研究成果の刊行に関する一覧（書籍）

執筆者氏名	論文題名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版年	ページ
Yao K, Nagahama T, Hirai F, Sou S, <u>Matsui T</u> , Tanabe H, Iwashita A, Kaye Philip and Ragunath Krish	Clinical application of magnification endoscopy with NBI in the stomach and the duodenum		Advanced Digestive Endoscopy	Blackwell Publishing	2007	83-103
<u>Matsui T</u>	Medical treatment of Crohn's disease in Japan—prevalence, treatment, and complications	Toshifumi Hibi	Recent Advances in Inflammatory Bowel Disease	ELSEVIER JAPAN	2007	108-116
Seki T, Hirai F, Sou S, <u>Matsui T</u> , Ikeda K, Iwashita A, and Ogata S	Jejunal metastasis from renal adenocarcinoma		Atlas of double balloon endoscopy		2007	106-108
長浜 孝、 <u>松井敏幸</u>	非特異性多発性小腸潰瘍症、腸管(型) Behcet 病	菅野健太郎、上西紀夫、井廻道夫	消化器疾患 最新の治療 2007-2008	南光堂	2007	244-246
津田純郎、 <u>松井敏幸</u>	炎症性疾患に対する治療—内視鏡的バルーン拡張術	原田容治、井上雄志	大腸・小腸の治療内視鏡	メディカルビュー	2007	72-77
<u>松井敏幸</u>	長期経過	日本炎症性腸疾患協会	潰瘍性大腸炎の診療ガイド	文光堂	2007	10-17
<u>松井敏幸</u>	非特異性腸管潰瘍	金澤一郎、北原光夫、山口 徹、小俣政男	内科学	医学書院	2007	850-852
<u>松本譽之</u>	IBD と生物学的製剤	林 紀夫、日比紀文、上西紀夫、下瀬川徹 編	Annual Review 消化器 2008	中外医学社	2008	75-80
余田 篤	小児クローン病の治療ガイドライン		大腸疾患 NOW	日本メディカルセンター	2007	181-187
<u>鈴木康夫</u>	潰瘍性大腸炎におけるペンタサ注腸療法および新用量の効果	杉原健一、藤森孝博、五十嵐正弘、渡辺聡明	大腸疾患 NOW	日本メディカルセンター	2007	183-187
<u>鈴木康夫</u>	便通異常	下条文武	ガ'カ'ノト 症候がわかる	西村書店	2007	184-186
細江伸央、鈴木康夫、山田哲弘、長村愛作、中村健太郎、青木博、吉松安嗣、津田裕紀子、高田伸夫、白井厚治	大腸における機能評価；13C 呼気試験の実際	平野修助	13C 呼気試験の実際—生命科学の解明に向けて	13C 医学応用研究会	2007	68-71
<u>杉田昭</u> 、小金井一隆、木村英明	炎症性腸疾患に伴う直腸肛門病変	寺本龍生	肛門部疾患診療最前線	株式会社診断と治療社	2007	102-113
伊藤壽記		Milsom JW, Bohm B, Nakajima K (編) 中島清一 (監訳)	腹腔鏡下大腸手術 日本語版	シュプリンガー・ジャパン	2007	131-148
<u>日比紀文</u>		<u>Toshifumi Hibi</u>	Recent Advances in Inflammatory Bowel Disease	Elsevier Japan	2007	
田中道寛、後藤啓、篠村恭久	炎症性腸疾患とアディポサイトカイン		Adipo science	フジメディカル出版	2007	Vol. 4(1) 61-67
中垣卓、後藤啓、有村佳昭、田中浩紀、細川雅代、山下健太郎、山本博幸、篠村恭久	大腸癌化学療法における biomarker の現状		消化器科	科学評論社	2008	46 巻 3 月号 (投稿中)

執筆者氏名	論文題名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版年	ページ
石黒 陽、山形和史、佐藤裕紀、 櫻庭 裕丈、福田 真作、棟方 昭博	緩解維持効果	炎症性腸疾患に おける AZA/6-MP の役割	臨床消化器内科	日本メディカル センター	2007	1573-80
山形 和史、石黒 陽、櫻庭 裕 丈、川口 章吾、佐藤 裕紀、福 田 真作、棟方 昭博	薬物療法を選択するとき 5-ASA/ステ ロイド/免疫抑制剤など	炎症性腸疾患の 治療をどう行う か—QOL からみた 治療の選び方—	消化器の臨床	ヴァン メディカル	2007	565-572
押谷伸英	炎症性腸疾患	岡庭 豊	year note 2008	医療情報科学 研究所 MEDIC MEDIA	2007	A54-A61
押谷伸英	腸管 Behcet 病	岡庭 豊	year note 2008	医療情報科学 研究所 MEDIC MEDIA	2007	A64

研究成果の刊行に関する一覧 (論 文)

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻 (号)	ページ	出版年
Tanabe H, Ayabe T, Maemoto A, Ishikawa C, Inaba Y, Sato R, Moriichi K, Okamoto K, Watari J, Kono T, Ashida T, Kohgo Y	Denatured human alpha-defensin attenuates the bactericidal activity and the stability against enzymatic digestion	Biochem Biophys Res Commun	22:358(1)	349-55	2007
Kato J, Kobune M, Ohkubo S, Fujikawa K, Tanaka M, Takimoto R, Takada K, Takahari D, Kawano Y, Kohgo Y, Niitsu Y	Iron/IRP-1-dependent regulation of mRNA expression for transferrin receptor, DMT1 and ferritin during human erythroid differentiation	Exp Hematol	35(6)	879-87	2007
Takahashi H, Hashimoto Y, Ishida-Yamamoto A, Ashida T, Kohgo Y, Iizuka H	Psoriasiform and pustular eruption induced by infliximab	J Dermatol	34(7)	468-72	2007
Takahashi N, Nagamine M, Tanno S, Motomura W, Kohgo Y, Okumura T	A diacylglycerol kinase inhibitor, R59022, stimulates glucose transport through a MKK3/6-p38 signaling pathway in skeletal muscle cells	Biochem Biophys Res Commun	17:360(1)	244-250	2007
Kohgo Y, Ikuta K, Ohtake T, Torimoto Y, Kato J	Iron overload and cofactors with special reference to alcohol, hepatitis C virus infection and steatosis/insulin resistance	World J Gastroenterol	21:13(35)	4699-706	2007
Mizukami Y, Kohgo Y, Chung DC	Hypoxia inducible factor-1 independent pathways in tumor angiogenesis	Clin Cancer Res	1:13(19)	5670-5674	2007
Fujiya M, Musch MW, Nakagawa Y, Hu S, Alverdy J, Kohgo Y, Schneewind O, Jabri B, Chang EB	The Bacillus subtilis quorum-sensing molecule CSF contributes to intestinal homeostasis via OCTN2, a host cell membrane transporter	Cell Host Microbe	14:1(4)	299-308	2007
Ohhira M, Motomura W, Fukuda M, Yoshizaki T, Takahashi N, Tanno S, Wakamiya N, Kohgo Y, Kumei S, Okumura T	Lipopolysaccharide induces adipose differentiation-related protein expression and lipid accumulation in the liver through inhibition of fatty acid oxidation in mice	J Gastroenterol	42(12)	969-978	2007
Tanno S, Nakano Y, Nishikawa T, Nakamura K, Sasajima J, Minoguchi M, Mizukami Y, Yanagawa N, Fujii T, Obara T, Okumura T, Kohgo Y	Natural history of branch duct intraductal papillary-mucinous neoplasms of the pancreas without mural nodules: long-term follow-up results	Gut	57(3)	339-343	2008
Motomura W, Yoshizaki T, Ohtani K, Okumura T, Fukuda M, Fukuzawa J, Mori K, Jang SJ, Nomura N, Yoshida I, Suzuki Y, Kohgo Y, Wakamiya N	Immunolocalization of a Novel Collectin CL-K1 in Murine Tissues	J Histochem Cytochem	56(3)	243-252	2008
武林亨、朝倉敬子、西脇祐司	炎症性腸疾患の疫学	総合臨床	56(8)	2425-2428	2007
Fukushima K, Fujii H, Yamamura T, Sugita A, Kameoka S, Nagawa H, Futami K, Watanabe T, Hatakeyama K, Sawada T, Yoshioka K, Kusunoki M, Konishi F, Watanabe M, Takahashi K, Ogawa H, Funayama Y, Hibi T, Sasaki I	Pouchitis atlas for objective endoscopic diagnosis	J Gastroenterol	42(10)	799-806	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
Shibata C, Funayama Y, Fukushima K, Takahashi K, Ogawa H, Haneda S, Watanabe K, Kudoh K, Kohyama A, Hayashi K, <u>Sasaki I</u>	Effect of calcium polycarboxophil on bowel function after restorative proctocolectomy for ulcerative colitis: a randomized controlled trial	Dig Dis Sci	52(6)	1423-1426	2007
Haneda S, Fukushima K, Funayama Y, Shibata C, Takahashi K, Tabata Y, <u>Sasaki I</u>	new drug delivery system targeting ileal epithelial cells induced electrogenic sodium absorption: possible promotion of intestinal adaptation	J Gastrointest Surg		568-577	2008
高橋 賢一、舟山 裕士、福島 浩平、柴田 近、小川 仁、徳村 弘実、佐々木 巖	クローン病診療の進歩：腹腔鏡手術	Modern physician	27(7)	989-992	2007
高橋 賢一、舟山 裕士、福島 浩平、柴田 近、小川 仁、徳村 弘実、佐々木 巖	潰瘍性大腸炎術後の早期経腸栄養	消化器科	45(1)	38-41	2007
舟山 裕士、長尾 宗紀、福島 浩平、柴田 近、溝井 貴之、高橋 賢一、三浦 康、小川 仁、小山 淳、佐々木 巖	難治性吻合部潰瘍に対し回腸肛門再吻合を行った潰瘍性大腸炎の1手術例	日本消化器外科学会雑誌	40(6)	752-756	2007
舟山 裕士、福島 浩平、柴田 近、三浦 康、高橋 賢一、小川 仁、鹿郷昌之、小山 淳、佐々木 巖	潰瘍性大腸炎の外科治療	外科治療		785-791	2007
福島 浩平、舟山 裕士、小川 仁、佐々木 巖、高橋 賢一	大腸全摘術後の回腸嚢炎の内視鏡診断	消化器内視鏡	19(6)	878-882	2007
福島 浩平、舟山 裕士、小川 仁、鹿郷 昌之、佐々木 巖、高橋 賢一	直腸、肛門病変と感染症・炎症性腸疾患を中心に-	臨床消化器内科	22(9)	1209-1215	2007
Hirai F, <u>Matsui T</u> , Yao K, Sou S, Seki T	Efficacy of carbon dioxide insufflation in endoscopic balloon dilation therapy by using double balloon endoscopy	Gastrointestinal Endoscopy	66(3)	S26-S29	2007
Ohmiya N, Yano T, Yamamoto H, Arakawa D, Nakamura M, Honda W, Itoh A, Hirooka Y, Niwa Y, Maeda O, Ando T, Yao T, <u>Matsui T</u> , Iida M, Tanaka S, Chiba T, Sakamoto C, Sugano K, Goto H	Diagnosis and treatment of obscure GI bleeding at double balloon endoscopy	Gastrointestinal Endoscopy	66(3)	S72-S77	2007
Matsumoto T, Iida M, <u>Matsui T</u> , Yao T	Chronic nonspecific multiple ulcers of the small intestine: a proposal of the entity from Japanese gastroenterologists to Western enteroscopists	Gastrointestinal Endoscopy	66(3)	S99-S107	2007
Fukumoto A, Tanaka S, Yamamoto H, Yao T, <u>Matsui T</u> , Iida M, Goto H, Sakamoto C, Chiba T, Sugano K	Diagnosis and treatment of small-bowel stricture by double balloon endoscopy	Gastrointestinal Endoscopy	66(3)	S108-S112	2007
Kobayashi K, Ueno F, Bito S, Iwao Y, Fukushima T, Hiwatashi N, Igarashi M, Iizuka B, Matsuda T, <u>Matsui T</u> , Matsumoto T, Sugita A, Takeno M, Hibi T	Development of consensus statements for the diagnosis and management of intestinal Behcet's disease using a modified Delphi approach	J Gastroenterol	42(9)	737-745	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
平井郁仁、松井敏幸	IBDの診断の最前線を探る－早期クローン病の診断の最前線(アフタのみのCD、indeterminate colitis、術後再発)－	IBD Research	1(2)	21-28	2007
西俣伸亮、関剛彦、平井郁仁、宗祐人、松井敏幸、太田敦子、池田圭祐、岩下明德、眞武弘明	ダブルバルーン小腸内視鏡検査で回腸病変を観察し得たHenoch-Schonlein 紫斑病の1例	Gastroenterological Endoscopy	49(6)	1440-1445	2007
松井敏幸	クローン病の自然史	Modern Physician	27(7)	896-900	2007
平井郁仁、松井敏幸	内視鏡的拡張術	Modern Physician	27(7)	921-926	2007
芦塚伸也、平井郁仁、松井敏幸	重症度評価と「緩解」の考え方	Progress in Medicine	27(4)	895-901	2007
津田純郎、松井敏幸	特集 めざせコロノ・エキスパート 炎症性疾患の大腸内視鏡診断	消化器内視鏡	19(3)	450-460	2007
二見喜太郎、河原一雅、松井敏幸	疾患マーカーとしての消化器病変－クローン病における肛門病変先行例の検討	第71回日本消化器内視鏡学総会記念誌		65-71	2007
松井敏幸、平井郁仁	特集 下部消化管疾患における最近の話題－最近増加している薬剤性腸炎とその対応	日本医師会雑誌	136(3)	486-491	2007
平井郁仁、関剛彦、八尾建史、松井敏幸	小腸疾患診断・治療の今後のアルゴリズム (3)腫瘍性病変、その他 a.小腸腫瘍性疾患の診断と治療の実際	早期大腸癌	11(3)	229-234	2007
松井敏幸、別府孝浩、平井郁仁、高木靖寛、西村拓、池田圭祐、小野陽一郎、松尾静香、矢野豊、久部高司、長浜孝、津田純郎、東大二郎、二見喜太郎	Crohn病の胃・十二指腸狭窄性病変に対する内視鏡的拡張術の有用性	胃と腸	42(4)	461-476	2007
久部高司、松井敏幸、宮岡正喜、頼岡誠、西村拓、村上右児、長浜孝、高木靖寛、平井郁仁、八尾建史、津田純郎、池田圭祐、岩下明德、二見喜太郎、眞武弘明	潰瘍性大腸炎の上部消化管病変の臨床と経過－頻度と経過を中心に－	胃と腸	42(4)	449-460	2007
矢野豊、松井敏幸	X線造影検査	消化器外科	12(6)	17-21	2007
芦塚伸也、平井郁仁、松井敏幸	5-アミノサリチル酸製剤と副腎皮質ホルモン	総合臨牀	56(8)	2486-2492	2007
松井敏幸	炎症性腸疾患の自然史－自然史は改善されたか？－	日本消化器病学会	104(8)	1172-1182	2007
松井敏幸	ヨーロッパのIBD診療ガイドラインを知り、比較する	IBD Research	1(3)	48-51	2007
松井敏幸	炎症性腸疾の診療ガイドライン	内科医誌	130	2-6	2007
松井敏幸、平井郁仁、小野陽一郎、中島力哉	Ⅱ.小腸内視鏡時代の小腸X線検査の意義	日本大腸肛門病学会	60(10)	933-939	2007
平井郁仁、松井敏幸	特集：ダブルバルーン内視鏡が変えた治療学 Crohn病以外(NSAIDsなど)の小腸良性狭窄に対する内視鏡的バルーン拡張術	消化器内視鏡	19(11)	1571-1575	2007
八尾恒良、江崎幹宏、平井郁仁、松井敏幸	Crohn病のX線および内視鏡	臨床放射線	52(11)	1563-1570	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
平井郁仁、高津典孝、二宮風夫、馬場崇徳、金光高雄、諸隈 強、辛島嘉彦、大津健聖、篠田竜平、宮岡正喜、楨信一郎、村上右児、別府孝浩、武市昌郎、西村 拓、津田純郎、松井敏幸、二見喜太郎、岩下明徳	Crohn 病における長期経過 経過良好例 (non-disabling disease) の予測	胃と腸	42(13)	1843-1858	2007
池田圭祐、岩下明徳、原岡誠司、大重要人、田邊 寛、太田敦子、西俣伸亮、平井郁仁、高木靖寛、松井敏幸	炎症性腸疾患の病理像からみた難治要因 Crohn 病を中心に	胃と腸	42(13)	1911-1920	2007
松井敏幸	粘膜治癒をもたらす治療は炎症性腸疾患 (IBD) 診療を変えるのか?	胃と腸	42(13)	1809-1811	2007
平井郁仁、松井敏幸	特集・炎症性大腸炎疾患の治療をどう行うか-QOL から見た治療法の選び方-潰瘍性大腸炎 治療効果判定のポイント-判定基準は何か	消化器の臨床	10(6)	583-590	2007
Fukunaga, K., Yokoyama, Y., Tozawa, K., Kamikozuru, K., Ohnishi, K., Hida, N., Ohda, Y., Kusaka, T., Nagase, K., Miwa, H. and Matsumoto, T	Selective Platelet Removal as a Novel Therapy for Refractory Crohn's Disease	Jpn J Apheresis	26(2)	266-271	2007
Yokoyama, Y., Fukunaga, K., Fukuda, Y., Tozawa, K., Kamikozuru, K., Ohnishi, K., Kusaka, T., Kosaka, T., Hida, N., Ohda, Y., Miwa, H. and Matsumoto, T	Demonstration of Low-Regulatory CD25 (High+) CD4 (+) and High-Pro-inflammatory CD28 (-) CD4 (+) T-Cell Subsets in Patients with Ulcerative Colitis: Modified by Selective Granulocyte and Monocyte Adsorption Apheresis	Dig. Dis. Sci	52(10)	2725-2731	2007
Fukunaga, K., Miwa, H. and Matsumoto, T	Role of Leukocytapheresis in the management of inflammatory bowel disease	Tropical Gastroenterology	28(1)	11-15	2007
Fukunaga, K., Ohda, Y., Inoue, T., Kono, T., Miwa, H. and Matsumoto, T	Toxic epidermal necrosis associated with mesalamine in a patient with ulcerative colitis	Inflammatory Bowel Diseases	13(8)	1055-1056	2007
Fukunaga, K., Hida, N., Ohnishi, K., Ohda, Y., Yoshida, K., Kusaka, T., Jinno, Y., Nagase, K., Nakamura, S., Kadobayashi, M., Miwa, H. and Matsumoto, T	A Suppository Chinese Medicine (Xilei-san) for Refractory Ulcerative Proctitis: A Pilot Clinical Trial	Digestion	75(2-3)	146-147	2007
Saniabadi, AR., Hanai, H., Fukunaga, K., Sawada, K., Shima, C., Bjarnason, I. and Lofberg, R	Therapeutic leukocytapheresis for inflammatory bowel disease	Transfus Apher Sci	37(2)	191-200	2007
Matsumoto, T., Fukunaga, K., Kamikozuru, K., Tozawa, K., Yokoyama, Y., Kusaka, T., Ohnishi, K., Miwa, H. and Nakamura, S	Cytapheresis as a Non-Pharmacological Therapy for Inflammatory Bowel Disease	Transfusion Medicine and Hemotherapy	35(1)	18-23	2008
Matsumoto, T., Iwao, Y., Igarashi, M., Watanabe, K., Otsuka, K., Watanabe, T., Iizuka, B., Hida, N., Sada, M., Chiba, T., Kudo, S., Oshitani, N., Nagawa, H., Ajioka, Y. and Hibi, T	Endoscopic and chromoendoscopic atlas featuring dysplastic lesions in surveillance colonoscopy for patients with long-standing ulcerative colitis	Inflammatory Bowel Diseases	14(2)	259-264	2008
嵯峨山健、池内浩基、中埜廣樹、内野 基、中村光宏、野田雅史、柳 秀憲、竹末芳生、 應田義雄、松本譽之、山村武平	回腸囊肛門吻合術 (IPAA) 時の肛門管粘膜切除部に扁平上皮癌を合併した潰瘍性大腸炎の1例	日本大腸肛門病会誌	60(5)	260-263	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
神野良男, 中村志郎, 荒川哲男, 松本豊之	小腸内視鏡を用いた治療	日本大腸肛門病学会雑誌	60(10)	964-969	2007
本谷 聡, 田中浩紀, 那須野正尚, 今村哲理	クローン病に対する生物学的製剤の進歩: Top-down 療法	Modern Physician	27(7)	963-967	2007
田中浩紀, 本谷 聡, 今村哲理	クローン病に対する Infliximab の効果と問題点: 大腸病変と小腸病変の比較	消化器科	45(4)	395-401	2007
本谷 聡, 田中浩紀, 中垣 卓, 那須野正尚, 今村哲理, 安保智典, 黒河 聖, 小澤 広, 前田 聡, 萩原武, 西岡 均, 中野渡正行	Crohn 病における Infliximab 治療: 粘膜治癒の維持と腸病変の推移	胃と腸	42(13)	1832-1842	2007
Masuda J, Mitsuyama K, Yamasaki H, Takedatsu H, Okamura T, Andoh A, Murohara T, Asahara T, Sata M	Depletion of endothelial progenitor cells in the peripheral blood of patients with ulcerative colitis	Int J Mol Med	19 (2)	221-228	2007
Mitsuyama K, Tomiyasu N, Masuda J, Yamasaki H, Tsuruta O, Sata M	High Affinity of Ecabet Sodium for Inflamed Colonic Mucosa in Ulcerative Colitis.	Dig Dis Sci	52 (6)	1442-1443	2007
Tomiyasu N, Mitsuyama K, Suzuki A, Masuda J, Yamasaki H, Kuwaki K, Takaki K, Kitazaki S, Sata M	Development of granulocyte and monocyte adsorptive apheresis in the rat dextran sodium sulfate-induced colitis model	Methods Find Exp Clin Pharmacol	29 (4)	265-268	2007
Aoki H, Nakamura K, Irie M, yoshimatsuY, Tsuda Y, Fukuda K, Hosoe N, Takada N, Shirai K, Suzuki Y	adacolumn selective leukocyte adsorption apheresis inpatients with active ulcerative colitis: clinical efficacy, effects on plasma IL-8, and expression of Toll-like receptor 2 on granulocytes	Dig Dis Sci	52	1427-1433	2007
Shiobara N, Suzuki Y, Aoki H, Gotoh A, Fujii Y, Hamada Y, Suzuki S, Fukui N, Kurane I, Itoh T, Suzuki R	Bacterial superantigens and T cell receptor beta-chain-bearing T cells in the immunopathogenesis of ulcerative colitis	Clin Exp Immunol	150(1)	13-21	2007
Tsuda Y, Aoki H, Nakamura K, Irie M, yoshimatsuY, Fukuda K, HosoeN, Takada N, ShiraiK, Suzuki Y	Clinical effectiveness of probiotics therapy (BIO-THREE) in patients with ulcerative colitis refractory to conventional therapy	Scand J Gastroenterol	42	1306-1311	2007
鈴木康夫	ガイドラインを活かした難治性潰瘍性大腸炎の治療	IBD Research	1 (1)	33-39	2007
鈴木康夫	抗 TNF- α 抗体療法の実際	Progress in Medicine	27(4)	55-60	2007
鈴木康夫	バイオロジックスの副作用—インフリキシマブ療法において起こりえる副作用とは—	IBD Research	1 (3)	212-218	2007
鈴木康夫	インフリキシマブ	臨床消化器内科	22 (12)	1627-1632	2007
鈴木康夫	クローン病に対する生物学的製剤の進歩—副作用と対策	Modern Physician	27(7)	957-962	2007
鈴木康夫	炎症性腸疾患における免疫抑制剤	総合臨床	56 (8)	2493-2497	2007
鈴木康夫	クローン病: 無効例、再発・再燃例にどう対応するか	ヴァンメディカル	10 (6)	633-638	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
鈴木康夫	潰瘍性大腸炎の新しい治療による粘膜治癒と経過—cyclosporineを中心に	胃と腸	42 (13)	1869-1875	2007
鈴木康夫	顆粒球吸着除去療法の有効性	日本医事新報	4364	89	2007
Andoh A, Sakata S, Koizumi Y, Mitsuyama K, Fujiyama Y, Benno Y	Terminal restriction fragment length polymorphism analysis of the diversity of fecal microbiota in patients with ulcerative colitis	Inflamm Bowel Dis	13	955-962	2007
Sugimoto K, Ogawa A, Mizoguchi E, Shimomura Y, Andoh A, Bhan AK, Blumberg RS, Xavier RJ, Mizoguchi A	IL-22 ameliorates intestinal inflammation in a mouse model of ulcerative colitis	J Clin Invest	118	534-544	2008
Andoh A, Bamba S, Brittan M, Fujiyama Y, Wright NA	Role of intestinal subepithelial myofibroblasts in inflammation and regenerative response in the gut	Pharmacology & Therapeutics	114	94-106	2007
Shioya M, Nishida A, Yagi Y, Ogawa A, Tsujikawa T, Kim-Mitsuyama S, Takayanagi A, Shimizu N, Fujiyama Y, Andoh A	Epithelial overexpression of interleukin-32alpha in inflammatory bowel disease	Clin Exp Immunol	149	480-486	2007
Yagi Y, Andoh A, Ogawa A, Bamba S, Tsujikawa T, Sasaki M, Mitsuyama K, Fujiyama Y	Microarray analysis of leukocytapheresis-induced changes in gene expression patterns of peripheral blood mononuclear cells in patients with ulcerative colitis	Ther Apher Dial	11	331-336	2007
Watanabe T, Kobunai T, Toda E, Kanazawa T, Kazama Y, Tanaka J, Tanaka T, Yamamoto Y, Hata K, Kojima T, Yokoyama T, Konishi K, Okayama Y, Sugimoto Y, Oka T, Sasaki S, Ajioka Y, Muto T, Nagawa H	Gene expression signature and the prediction of ulcerative colitis-associated colorectal cancer by DNA microarray	Clin Cancer Res	13(2)	415-420	2007
Kojima T, Watanabe T, Nagawa H	Basic fibroblast growth factor enema improves experimental colitis in rats	Hepatogastroenterology	54(77)	1373-1377	2007
Matsumoto T, Iwao Y, Igarashi M, Watanabe K, Otsuka K, Watanabe T, Iizuka B, Hida N, Sada M, Chiba T, Kudo SE, Oshitani N, Nagawa H, Ajioka Y, Hibi T	Endoscopic and chromoendoscopic atlas featuring dysplastic lesions in surveillance colonoscopy for patients with long-standing ulcerative colitis	Inflamm Bowel Dis	14(2)	259-264	2008
渡邊聡明	増え続ける炎症性腸疾患—最新の治療—潰瘍性大腸炎のサーベイランスと Colitic Cancer	外科治療	96(4)	792-800	2007
渡邊聡明	colitic cancer の新しい診断 pit pattern から molecular まで 潰瘍性大腸炎の腫瘍化における病理と molecular event メチル化解析・マイクロアレイ解析の意義	早期大腸癌	11(1)	21-25	2007
板橋道朗、番場嘉子、廣澤知一郎、小川真平、亀岡信悟	5. 潰瘍性大腸炎 特集 外科疾患 データブック	外科	69(12)	1437-1442	2007
番場嘉子、板橋道朗、廣澤知一郎、小川真平、野口英一郎、竹本香織、城谷典保、亀岡信悟	周術期に深部静脈血栓症および肺塞栓症を合併した潰瘍性大腸炎症例の検討	日本大腸肛門病会誌	60 (6)	342-346	2007

執筆者氏名	論文題名	雑誌名	巻(号)	ページ	出版年
KENJI KOMAYASHI, FUMIAKI UENO, YASUSHI IWAO, TSUNEO FUKUSHIMA, NOBUO HIWATASHI, MASAHIRO IGARASHI, BUN-EI IIZUKA, TAKAHIDE MATSUDA, TOSHIYUKI MATSUI, TAKAYUKI MATSUMOTO, AKIRA SUGITA, MITSUHIRO TAKENO, and TOSHIFUMI HIBI	Development of consensus statements for the diagnosis and management of intestinal Behcet's disease using a modified Delphi approach	J Gastroenterol	42	734-745	2007
小金井一隆、杉田昭、木村英明、大槻恭子、二木了、鬼頭文彦、福島恒男	Crohn 病の直腸肛門病変の外科治療	外科治療	96 (2)	145-151	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、二木了、鬼頭文彦、福島恒男	多発性痔瘻を伴う Crohn 病の治療	外科治療	96 (2)	821-828	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、二木了、福島恒男、鬼頭文彦	大腸良性疾患—炎症性腸疾患	臨床外科	62 (5)	589-597	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、鬼頭文彦、福島恒男	大腸切除後の潰瘍性大腸炎患者における癌発生	臨床消化器内科	22 (7)	150-158	2007
杉田昭、木村英明、小金井一隆、大槻恭子、二木了、福島恒男、鬼頭文彦	Crohn 病の胃・十二指腸病変に対する外科治療	胃と腸	42 (4)	477-484	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、鬼頭文彦、福島恒男	クローン病手術例の術後再発とその対策	Modern Physician	27 (7)	101-105	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、二木了、鬼頭文彦、福島恒男	直腸脱の診断・治療のコツと実際	臨床外科	62 (10)	1371-1379	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、二木了、鬼頭文彦、福島恒男	クローン病に対するアザチオプリンの効果と副作用からみた使用法	消化器科	45 (4)	370-376	2007
杉田昭、小金井一隆、木村英明、山田恭子、鬼頭文彦、福島恒男	消化管Ⅱ Crohn 病	外科	69 (12) (2007-11 増刊)	1443-1449	2007
Sagayama K. Ikeuchi H. Nishigami T. Nakano H. Uchino M. Nakamura M. Noda M. Yanagi H. Yamaura T	Incidence of and risk factors for dysplasia in mucosectomy area in ulcerative colitis patients undergoing restorative proctocolectomy	Int J Colorectal is	22	439-443	2007
柳生利彦、柳 秀憲、池内浩基、野田雅史、吉川麗月、外賀 真、中埜廣樹、内野 基、橋本明彦、大嶋 勉、中村光宏、竹末芳生、山村武平	ビギンラインアプローチ法による 1 期的大腸全摘、回腸囊肛門吻合術の検討	日本大腸肛門病会誌	60	77-82	2007
池内浩基、山村武平、中埜廣樹、内野 基、中村光宏、野田雅史、柳 秀憲、竹末芳生、柳生利彦、外賀 真、大嶋 勉、橋本明彦、松本蒼之	高齢者潰瘍性大腸炎手術症例の予後の検討	日本大腸肛門病会誌	60	136-141	2007
嵯峨山 健、池内浩基、中埜廣樹、内野 基、中村光宏、野田雅史、柳 秀憲、竹末芳生、應田義雄、松本蒼之、山村武平	回腸囊肛門吻合術 (IPAA) 時の肛門管粘膜切除部に扁平上皮内癌を合併した潰瘍性大腸炎の 1 例	日本大腸肛門病会誌	60	260-263	2007
竹末芳生、香山茂平、中島一彦、池内浩基、富田尚裕	潰瘍性大腸炎術後における回腸囊炎疑診例に対する診断と治療方針の決定	外科治療	96 (5)	951-952	2007